

「都市雑業層」の現代的展開と「労働市場としての都市」

——エスニック・ネットワークの意味を巡って——

広 田 康 生

はじめに——本稿の意図——

本稿では特に都市地域において、外国人労働者を中心として形成されるエスニック・ネットワークの経済社会的性格とその意味について考察している。

外国人労働者問題を巡って今、様々な分野からの議論が提出されている。だがそうした論議にもかかわらず、確実に彼らの生活世界——それをとりあえずエスニック・ネットワークと呼ぶ——が形成され、様々なエスニック・ビジネスの形成が進行したことは紛れもない事実である。外国人労働者とその世界をエスニック・コミュニティの概念をとおして研究してきた伝統をもつ都市社会学においても、彼らのそうした「活動」に対し、もはや事実発見的に調査報告を繰り返す時期は終わり、その意味に関する理論的な検討が要請される時期に来ている。

ここでは構造に規定されつつ自らの生活の再生産にいどむ彼らの「主体的な状況選択」やそのバイタリテイの表す意味をどうとらえるか、特定の都市をネットワークの拠点とする理由、そうしたネットワークを支える人々をどのように捉えるか、といった問題に解答することが要請される。

本稿では、外国人労働者の形成する日常的なネットワーク——エスニック・ネットワーク——の性格とそこでの行為主体の経済社会的な意味を、「労働市場としての都市」への参入を支えるパーソナル・ネットワークに注目しつつ、「都市雑業層」の新たな展開として捉え、準備的な考察を行いたい。

I 労働力の国際移動と「労働市場としての都市」

外国人労働者と彼らが形成するネットワークの、我が国社会に提起する意味を考察する場合、我々は次の諸問題についてある程度の解答を得ておかなければならない。すなわちなぜ労働力の国際移動が発生し、またなぜ彼らが日本社会に流入してくるのか、との問題である。

周知のようにこうした問題を巡っては、これまで、世界資本主義システムにおける中心（中心部労働市場）と周辺（周辺部労働市場）の発生に関する理論的検討を背景に（玉井・杉原一九八三、伊豫谷・梶田一九九二）、世界都市における産業構造の変化とそれにもなう労働市場の構造変化に関する理論的、実証的な研究がなされてきた（町村一九九四）。いわば、世界資本主義システムにおける地域の不均等発展と相対的過剰労働力の創出、産業構造の変化にともなう底辺労働力の需要の増大、新しい「仕事の構造」の展開といった諸要因が、国際労働力移動と、彼らを吸引する都市Ⅱ世界都市に関する説明枠として提出されてきた。

本稿でも、無論、労働力の国際移動に関するこうした理論的枠組みが、その基本的な出発点であることに異論をさしはさむものではない。だがこうした説明枠組みには、幾つかの点でそれを補完する研究が必要であることもまたたしかである。第一に、産業構造の変化と外国人労働者の流入現象との結びつきのあいだに、中間的、媒介的な説明が必要であること。とりわけわが国産業構造の変化と外国人労働力の増加との間にはタイム・ラグが

あるとの指摘もある〔伊豫谷 一九九二〕。このタイム・ラグにはどのような社会的、経済的要因がかかわっているのか。そして第二に、上記の諸理論は、彼らがそのなかで生きている経済的世界の構造、すなわち資本の再生産構造の変化に焦点をあててはいるが、そのなかで特定の経済的傾向をもって行動する行為主体の提起する意味についてまで説明しているとは言いがたい、ということ。とりわけ現在の外国人労働者の形成する様々なネットワークの創出や様々なビジネス・ネットワークの創出を見ると、上記の構造変化に規定される客体としての彼らの問題と同時に、そのなかで、いわば「生活の再生産への主体的選択」〔浅野 一九九三〕を行う、行為主体としての行動や「生き方」の意味を積極的にとらえる必要がある。言ってみればここでは、資本蓄積の過程を、資本の再生産過程に注目するだけではなく、行為主体の労働力の再生産過程にも注目しつつ、そのわが国社会に提起する意味を積極的に捉えることが要求されているということになろうか。

では、労働力の国際移動に関わる構造変化のなかで、行為主体としての彼らの提起する意味をどのように位置づけていけばいいのか。

先ず、筆者は彼らが国境を越えて移動するときその拠点をなす都市の、「労働市場としての側面」をどのようにとらえていくか、にそうした考察のポイントがあると考ええる。ここで意味する「労働市場としての都市」とは何か。「労働市場としての都市」のどのような側面が問題になってくるのか。無論ここで問題となる「労働市場」とは、単に資本の再生産過程の構成要素としてのそれではない。とりわけ外国人労働者をめぐって問題となるのは、その「労働市場」の形成のされ方、特にその「調達」、すなわち労働力の配分と選抜を現実に「調整」し、動かす社会的な仕組みの問題である。

無論「労働市場としての都市」という概念については、都市社会学の分野においてすでに指摘がある。例えば、D・ハーベイは次のようにそれを定義している。「都市域を定義する基本的属性のひとつは、雇用機会と労働力との日常的な代替がなされているような地理的労働市場である」〔ハーベイ、D一九九一〕。

無論、D・ハーベイも指摘しているように、この労働市場は基本的には「労働力の価値の決定機構」〔氏原・高梨一九七二〕なのであるが、その範囲としても「それじたい社会的、技術的諸条件によって歴史的に規定され」〔なんらかの明確な境界をもって終わるわけではなく〕「あらゆる類の独自性や不完全性」をもつ。そうした「独自性や不完全性」としてハーベイは「特定の職種が特定の種類の労働者〔のために〕」とおかれるといった分断」や「特定の種類の労働者が……地理的にはつきりと分かれた部分市場にとじこめられてしまったり」するような「構造的な硬直性」を指摘している〔ハーベイ一九九一〕。

だが、とりわけ外国人労働者およびエスニシティの、労働力の調達過程や労働力の再生産過程に焦点を合わせた時、こうした一般的な説明だけでは不十分なのである。

外国人労働者の就業機会の獲得、あるいは彼らのビジネス・ネットワークの形成にとって注意すべき点は、それが、単純な市場原理で機能しているわけではないという点である。上述のハーベイの論議に従うなら、彼らに特有な労働市場のもつ「独自性と不完全性」を「柔軟化」するプロセスの検討が必要となる。とりわけ、資格や条件の点で、労働市場への参入障壁が高い外国人労働者の場合には、そして特にエスニック・ビジネス等彼らの経済活動の遂行については、これまで、当該の地域において形成されてきた、就業にかかわるものも、そうでないものも含めて様々な制度や習慣そして人間的ネットワークが、重要な媒体として活用されなければ、その経済的要求は実現されない。いわば、行為主体としての彼らの経済行動に阻害要因となる様々な公的、準公的な障壁

をすり抜ける、パーソナルなネットワークの存在が重要になる。

すなわち、ここで問題とする外国人労働力の「労働市場」への配分の問題には、「労働力の価値の決定機構」として、市場原理にもとづく労働市場への参入の問題に加えて、当該都市に歴史的に形成されてきた様々な社会関係のなかに「埋め込まれた」経済世界への参入のプロセスや、それを現実に動かしていく様々な「社会的繋がり」に、目を向けることが重要となってくるのである。すなわちここで我々は「調整様式」のある領域に関わることになるのである〔山田 一九九一 ボワイエ 一九九〇〕。

実際、労働市場を現実に動かし、また調整するパーソナル・ネットワークの働きに関するこうしたいわば社会的な視点については、近年注目を集めているところでもある〔刈谷 一九九四〕。とりわけ、なぜ特定の都市を拠点に、外国人労働者がその就業ネットワークを形成するのか、との考察にはこうした問題がきわめて重要な鍵となる。エスニック・ネットワークの形成に絡む「労働市場としての都市」の問題は、「労働力の価値の決定機構」に影響をあたえる様々な社会的要因、とりわけそうした機構への労働力の参入の「諸社会関係のなかに埋め込まれた」メカニズムの問題に改めて照明をあてることになる。

では、以上のような意味での労働市場への参入は、(1)具体的にどのような社会的ネットワークをとおして実現されているのか、そこで重要な役割をはたす社会的な要因群は何か。そして、(2)そうしたネットワークを通して、当該の行為主体はどのような性向をしめすのか。それを支える人々とは誰か。具体的に考察してみたい。

II エスニック・ネットワークの構造と性格

「労働市場としての都市」のもつ「独自性と不完全性」を「調整」ないし「柔軟化する要素」として、人口移動、教育諸過程とそれによる文化的変容、社会事業、ゾーニング等の地域政策などが上げられることは周知のとおりである（ハーベイ一九九三）。これらはいわば「制度的な」「調整」機能である。

だが、外国人労働者の労働力条件としての特殊性に注目したとき、それをおして彼らがその経済的世界に入り、また、その経済的試みを実現していく日常的なエスニック・ネットワークの存在が特に問題となる。とりわけ、「行為主体の経済的性向と、行為主体が活動しなければならない経済的世界との絶えざる不一致」（ブルデュー一九九三）が大きい外国人労働者ないしエスニシティの経済活動にあつては、この状況を乗り切る彼らの「日常的な実践」に注目することなしには、彼らの行動特に経済的な行為のもつ意味は理解できないし、それに「共鳴盤」をなすもう一方の行為主体としての人々の意味も理解できない。

では実際、彼らのパーソナルなネットワークはどのように形成されているのか。ここでは、ニューカマーの日系南米人の形成するネットワークに関する筆者の具体的な調査を抛り所にしつつ、その性格の若干を取り出してみたい。ここで日系南米人のネットワークを取り上げるのは、彼らが合法的に認められた外国人就労者であるということの他にも、彼らの就労とエスニック・ビジネスの形成は、特にわが国において、彼らと「共振」する人々とのネットワーク的繋がりにおいて進展し、その意味で後述の論議に都合がよいからでもある。

なおここで要点を取り出す筆者の事例調査については、すでに別稿にて詳細な報告がなされているので（広田

一九九五」、本稿では概要をのべていきたい。

さて、第一に外国人労働者の就業ネットワークの形成には、「特殊な媒介者」の存在が重要な契機をなす、という点を指摘しておかなければならない。

いわゆる外国人労働者がわが国社会に流入する時、そこに、媒介する人や機関が関わることは既に様々な指摘がある。かれらは資格や条件の点でそして国境をこえた生活への不安等の点できわめて高い参入障壁をこえなければならぬ。ここに媒介者を必要とする根拠がある。だがこうした「媒介者」の役割は、単に労働力の移動に関わるだけではない。むしろ彼らの役割は、当該地域と母国の労働者との間をあらゆる意味で繋いで、職業紹介を越えた生活の全般にわたる橋渡しをおこなう点にある。

横浜市鶴見区U地区には日系南米人のネットワークの拠点が形成されているが、同地区には日系南米人が集中した原因の一つは、沖縄県人会の存在にある。もともと同会は沖縄からの季節工の来住にあたってインフォーマルな生活相談を引き受けてきた。一九八〇年代後半からの外国人労働者の流入にあたって、いち早くそれに目を付けたのが、人材派遣業「S電設」である。「S電設」のS氏は、同会の会員としてのネットワークを活用し、同会の会長を専務として同企業に迎え入れ、彼を起点にして日系南米人を集めた。同企業は最盛期には六〇〇名の人員を雇用した。その後この地区には、大小様々な人材派遣業が営業をはじめることになるが、そのなかには、同企業でノウハウを覚えた日系南米人の営業する人材派遣業も少なくない。彼らは同地域で形成されてきた様々な人間関係を利用して、日系南米人と地域との間を媒介した。

ところで当該社会に流入した外国人労働者は、必ずしも当初の職場や地域での経済行為に甘んじているとは限らない。彼らは、その経済的性向と生活的諸要求を実現するため、様々な可能性を求めて移動を始める。そして

その要求を実現するために、様々な拠点あるいはネットワークの「緊留点」を形成し始める。

そうした「緊留点」は外国人労働者のエスニシティの違いによって様々な形態をとるが、例えば上記の「人材派遣業」の他にそれは「旅行社」「レストラン」「送金代行業」「日本語教室」「学校」「ディスコ」「ボーリング場」等様々な人や施設や機関がその「緊留点」として機能し、それらが、人や事業や各種——教育的、親睦的、福祉的その他——要求に基づいて、相互に連携をとりあってネットワークを形成しているところに特徴がある。

したがって、彼らのネットワークにおいては、生活にかかわる様々な問題処理、及び相互扶助の機能が複雑に重層し、そのなかから就業機会に関する情報のみならず、新しい経済的活動が生まれる場合があるという点を強調しなければならない。生活にかかわる様々な問題とは例えばアパート探しから子供の学校入学まで多岐に渡ることが、なかには、障害児童の世話など、公的な機関には依存できない問題も多く、こうした問題にかかわる過程で形成されるパーソナルな繋がりが、その両親の就業機会への情報提供を促したり、あるいは、その繋がりが、経済的な繋がりに発展する場合も少なくない。上記の結び目となる施設はある意味でエスニック・ビジネスの「拠点」でもあるのだが、彼らのそうした経済行動自体が、パーソナルなネットワークと重層しているのである。無論こうした生活情報を伝達するエスニック・メディアの役割も見逃せない。この場合エスニック・メディア自体が多角的な経済活動を展開する場合もある。

上記U地区においては人材派遣業やそこで働く日系南米人就労者とその家族にとってなじみ深い施設として、あるブラジル料理店の存在がある。同店の経営者T氏は、その結婚相手であるご主人が沖縄出身者で、被差別の経験もあったことから、同地区に日系南米人が増加したのを機に同料理店を始めた。同店が同地区で唯一のブラジル料理店であったことから同店は彼らの溜まり場となり、次第に、ここを中心に、行政では充たされない様々な要求がここを通じて充たされるようにな

った。例えば、各種の書類の書き方に始まって、子供の保育園の入園、学校入学のアドバイス、不動産の紹介、いざこざの相談、就業機会の揭示、その他身の上相談など。特にここに集まる人々は、従業先での待遇その他様々な情報交換を行いその噂は、他地域からこの店を目指して、人が集まるほどになっている。

この店にはまた日本人の営業者たちも集まる。その多くは同地域での長いあいだの友人関係を結んでおり、彼らの私的なネットワークを通じて就業する人々も多い。

この店にはまた学校関係者も顔をだす。同地区の学校ではまた日系南米人児童生徒を中心とするいわゆる外国人児童生徒問題が持ち上がっているが、彼らの母語の保証、彼らの日本語教育、そして出身地への誇り、差別問題に対し様々な活動が、この店に集まる人々の協力によって実施されている。

またこの店に常連のある日系人グループは、東京でレストランをかしきって、各地から同じ日系人の若者を集め、デイスコを経営した。彼はスタッフは、すでに東京の六本木で同様の店を経営している同国人からそのノウハウを覚えた。そのネットワークは、厚木にあるエスニック新聞を通じて全国に流される。

こうした人や機関や施設はどのようにしてその「繋留点」の役割を担うようになったのか。もともと彼らが特定の地域にネットワークの拠点を形成するのは、そこにエスニシティを同じくする前住者の存在とそれに「共振」する人々の存在が大きい。当該地域におけるエスニシティの受容と排除の歴史的構造がここに関わってくる。過去から現在にいたるまで、外国人労働者がとりわけ都市の推移地帯に生活の拠点を形成するというのが指摘されるが、それは単に、同地域が異質性の高い、そして経済的費用が低いということ以上に、当該地域において歴史的に形成されてきたエスニシティ受容のネットワークが、ありとあらゆる生活機会の提供をうながすのに機能しているという点が大きい。そしてこうしたエスニシティ受容の歴史的構造においてポイントになるのが、「都市小生産者層」及び「都市雑業層」なのである。彼らは一方でエスニシティのネットワークを支え、そ

して他方でエスニシティのネットワークによってその経済活動を促される。その意味で彼らのネットワークは「都市雑業層」のネットワークでもある。

彼らの役割と意味については別稿にて詳細に論ずるつもりであるが、ときにエスニシティを同じくする人々と親族的関係をもつこうした「小生産者層」ないし「都市雑業層」に属する特定の個人がキー・パーソンとして彼らのネットワーク形成に大きな役割をはたしている現実にも我々は目を向けておかなければならない。

鶴見U地区が京浜工業地帯のなかにあって中小零細商工業の密集地としての歴史をもつことは周知のとおりである。U地区がそうした地域の特徴を示し始めたのは大正初期に遡る。川崎市編『川崎労働史』によれば、一九一八年（大正七年）初頭に労働者二〇〇〇人をこえる工場は川崎に三箇所、鶴見に一箇所あったと、記載されているが、それがこのU地区の「浅野造船」であった。「近頃では新築家屋の柱一本立てばもう借手が押し合うという始末。したがって家賃などもその頃よりは二割り乃至四割り高位になっている」（前掲書）とは、同造船が建設された当時のU地区周辺の状態であった。したがって同地には、こうした工場で働く工場労働者とともに、いわゆる「土工」「人夫」「小商業主」「家内労働」等、いつてみれば、その多くは委託募集や縁故募集を通じて目にみえない形で形成された雑業的な仕事に従事する人々が密集した。そして、こうした状態は、戦後まで続く。実は、上記で示したT氏の御主人の祖父もまた、こうした人々の一人として沖縄から来た人であった。彼らの「緊留点」としての役割遂行はまた、彼らの階層的な変質の過程を示唆するものでもある。

移住当初における「媒介者」の存在、移住後における「緊留点」の存在とそのエスニック・ビジネスの拠点としての役割、当該地域におけるエスニシティ受容の歴史的構造、そしてそのなかではたす「都市小生産者」「都市雑業層」の役割が、彼らのネットワーク形成の大きな特徴であり、このネットワークを踏み台にしつつ彼らの経済行動が営まれる。ちなみに彼らは無論経済的に恵まれているとはいえない。しかし、現在の境遇と母国での

社会的経済的地位とのギャップが、このネットワークによってある程度迂回されることもあるということ、そして、あえていえばこのネットワークを通じて実現される一種の「起業家精神」が、彼らの帰属意識と現実の状況とのギャップを埋める心理的な支えとなることについても我々は注目しておいてもいいかもしれない。そして経済世界への参入のこの社会的過程こそ、「労働市場としての都市」に歴史的に形成されてきた社会的な調整機構としての役割をはたす。

ところで前述のように、上記のネットワークはある意味で「都市雑業層」のネットワークといえることができる。したがって彼らの形成するネットワークの意味と彼らの「生き方」の提起する意味は、「都市雑業層」の現在の意味をどう捉え直すかということにかかわってくる。次にこうした角度から彼らの提起する意味について考えていこう。

Ⅲ 都市雑業層の現在の位相

「都市雑業層」と外国人労働力との関係については、日本近代都市形成のなかで、その密接な関係が指摘されている。例えば杉原と玉井は、近代日本の労働市場の二重構造のその下に、いわば「スラム労働市場」を設定し、労働市場の三層構造を指摘し、それがいわゆる「都市雑業層」と外国人労働力からなることを指摘している（杉原・玉井一九八六）。また山脇も、近代日本の「内地雑居問題」に関連して、外国人労働力が、都市雑業層のなかに流れ込んでいる実態を指摘している（山脇一九九四）。外国人労働力が、いわば「都市雑業層」を形成する一構成要素であることについては異論がないところであろう。

ところで近年、外国人労働力を含む「都市雑業層」の構造的な位置付けと役割については、その「半プロレタリア」としての役割に注目される傾向がある。例えば、I・ウォーラーステインは「都市雑業層」を含む「都市下層」の「半プロレタリア的 성격」について言及した箇所において次のように述べている「……じつさい、賃金労働者の雇主たちは、プロレタリア化の促進にはまったく熱意を示さず、他方では、性別や年齢による分業を奨励しているばかりか、雇用パターンと政治面での影響力を駆使して、特定の民族集団を取り出し、これに全体の労働力編成のなかで特定の役割を担わせることにも熱心であった……民族差別は文化的な外皮をまとうようになり、半プロレタリア的な世帯構造を固定してしまう」〔I・ウォーラーステイン 一九九四〕。

現在の「都市雑業層」をこうした角度からのみ理解することは現状にそぐわない。これまで記述してきたように、その就業世界への参入、そしてビジネス・ネットワークの多様な形成に即して言うならば、とりわけ彼らの、「経済的行動主体」としての側面に焦点を合わせる必要がある。

彼らの行為主体としての性格に焦点をあわせた研究としては、P・ブルデューの研究も参考になる〔ブルデュー 一九九三〕。ブルデューは、植民地化された世界になぜ西欧流の経済システムが根づかないのか、資本主義に必要な人間類型とはどのようなものか、という観点から、経済的に従属する世界における、いわば「都市雑業層」を含む「都市下層」の経済行為を、移植されたシステムへの受動的な適応という観点からではなく、「経済システムに様々に関わる個々人の経験と実践」のなかから見ていこうとする。ブルデューが示唆的なのは、行為主体としての行動の性向に注目しつつ、そのなかで生きる経済的世界の意味を問おうとしている点である。ここ

ではなくとも都市下層の問題は、彼らの「日常的実践」に注目することで、「安全弁の底辺労働者」としてただシステムの維持に利用される存在でもなければ、また過去へのノスタルジックな「経済人イメージ」を負わされた存在としてでもなく、その経済システムが現実にもそこにおいて動いていく、まさにその媒体としての意味が与えられている点である（もっとも、アルジェリアでの都市下層に関するブルデューの分析そのものについては疑問の余地はないわけではない）。わが国都市における「都市雑業層」の、その行為主体としての意味の問題として考察していく場合、こうした問題提起も極めて重要な意味をもつ。

日本の都市形成において「都市雑業層」が一定の役割を果たしてきたことについては周知のとおりである。だが、その積極的な、都市構造に果たす役割について指摘した伝統的都市社会学分野の研究は少ない。むしろ「都市雑業層」の研究は、従来の伝統的な都市社会学にあつては、貧困問題としての位相あるいは都市病理としての位相の研究に終始してきたという経緯がある〔磯村 一九六四〕。

「都市雑業層」を都市の「小生産者層」の構造的役割というより広いレベルで捉えたとき、その構造的な役割に言及したのは、都市の政治経済学的諸研究である〔島崎・北川 一九六二〕。ここではそうした「都市小生産者層」の問題は、日本都市における近代的階級関係の生成と展開の過程で、その「分解する側面」に焦点が合わせられる傾向があった。無識、都市形成論の分野において、その積極的な意味についての考察がなかったわけではない。特に似田貝香門は、日本の近代都市形成の性格を解く上で、「都市の重層性」と「社会構造と経済構造の相互否定的関連」がポイントであるとして、その中ではたす、都市雑業層を含む中産的生産者層の構造的な意味をとり上げた〔似田貝 一九七三〕。だがそれ以降、この分野からの研究は、特に現代都市との関連でのそれは少

ない。それは、特に中枢管理機能の所在地としての都市、もしくは「生産点としての都市」に焦点をあてる場合の当然の結果でもあった。(ただし近年では、より広い文脈の中でこの問題を扱う、注目すべき諸研究が出ている。これらの諸研究については、稿を改めて触れるつもりでいる)。

さて近年、「労働市場としての都市」における「都市雑業層」の積極的な役割を巡る研究は、経済学の分野においてなされてきた。

もともと「都市雑業層」のもつ積極的な意義を、日本資本主義における労働力需要の構造において初めて明らかにしたのは隅谷三喜男である(隅谷 一九六四、一九六七)。隅谷は、大河内一男氏の理論を批判的に検討しつつ「都市雑業層」の問題について、それが「明治以来一般に貧民層と呼ばれ、貧困問題の対象となってきたのであるが、労働市場の構成要素としてとりあげられることは比較的稀であった」と述べ、日本資本主義における「資本蓄積に対応する労働力需要の構造」の分析において、「本来的な賃労働関係の成立のみを問題にする」のではなく、「とくに日本における資本蓄積は、官業・財閥資本の系譜をひく大企業とそれに従属する中小企業のほか、零細工業・家内労働・零細小売商等、雑多な営業を多数包含し、そこに本来的な賃労働のほかに零細企業労働者、家族労働者、家内労働者、人夫・日雇いその他雑業等、雑多な生業が含まれている」「都市雑業層」の構造的な意味についての考察を展開した。

隅谷の研究において重要な点は、当時まで支配的であった、いわゆる「原生的労働関係」論と一定の距離を保ちつつ、「都市雑業層」が都市の労働市場において一種の「インキュベーター」としての役割を担ったことの指摘にある。「……こうして雑業層が過剰人口のもっとも有力な貯水池となり、賃労働として雇用されない農村過

剰人口の流出先ともなったのである。ということはいまや農家の生活水準ではなく、雑業層の多就業家計こそが、労働条件、直接的には零細企業の労働条件を規定し、間接的には中および大企業の労働条件を段階的に規定するに至ったのである」（隅谷 一九六四 P 八二）。

ところで、こうした隅谷の指摘を部分的に継承し、それを世界資本主義における分業体制の中に置き戻して検討しているのが玉井と杉原の一連の研究である〔玉井・杉原 一九八三、一九八六〕。玉井と杉原は、近代日本資本主義の位置を、必ずしも「周辺部」におくのは妥当ではないとし、いわゆる「原生的労働関係」Ⅱ「前近代」という図式に一定の留保をおき、「都市下層」の積極的な意味について検討した。

玉井と杉原の研究が「現在」の「都市雑業層」の研究——玉井と杉原の対象は正確には「スラム労働力」であるが、本稿での対象と重なる部分が多い——にとって示唆的なのは、第一に、それを国際的な分業体制の（変動）の中に位置づけてその役割を考察している点、第二に、彼らの「労働市場」の形成にあって、特に「労働力の調達と管理」における「伝統的な支配原理」の重要性を指摘している点である。そしてここから、複合的な地域形成の重要性とパーソナル・ネットワークの重要性が指摘される。

実際、外国人労働者のネットワーク形成と、それに「共振」する人々の問題は、単に「最低辺労働者」としてのそれに解消されるのではなく、また単なる「安全弁」としてのそれに解消されるのではない。いわば「蓄積体制」の変化の中で、そのはたす役割が正当に検討されなければならないし、また、そこにはたす都市の様々なネットワークの検討をも促す存在として、提起されているのである。

IV 小括

以上本稿では、特に都市における外国人労働者の形成するネットワークの、都市研究に提起する意味について、第一にそれが、「労働市場としての都市」への参入障壁を迂回する手段になっていること、そして第二にそうした手段を活用してわが国社会に入ってくる彼らの社会経済的な役割を、現代における「都市雑業層の展開」の中に位置づけ、その社会経済的な構造変化における新しい位置と、行為主体としての彼らの「生き方」において研究する必要性を提起していることを明らかにしてきた。

ところで、彼らのネットワークをこうした問題レベルに移して考察するということは、都市社会学においてどのような意味をもつか。実はここには、都市社会学においてこれまで蓄積されてきた「住民」組織論からコミュニティ論にいたるまでの研究成果を、労働力の国際移動のなかで果たす都市の役割変化の問題状況のなかで、どう解釈し、検討していくか、という問題意識と結びつく。

実際、都市で独自のネットワークを形成し、エスニック・ビジネスに参入する外国人労働者にとって、わが国社会での「合理的な選抜の規則」が設ける障壁を迂回するその仕方は、当該地域に形成されてきた様々な「住民」組織のあり方と関連し、それに規定されつつ、その上を動いていく。したがって、彼らの行為主体としての経済的行為が直面する問題は、わが国都市に形成されてきた地域社会の歴史的性格の問題をあらためて提起することになる。

したがって今後我々は次の問題に更に詳細な検討を加えていく必要がある。すなわち、彼らの日常的なネットワーク形成のなかからどのようなエスニック・ビジネスと就業機会が生まれてくるのか。そしてそうしたネットワークにかかわって、あるいはその結び目として、当該地域の小生産者層および「都市雑業層」は、そのネットワークをどのように活用して、彼ら自身の経済的世界を形成していくのか。例えばそれが、日雇いや労働者のよう

な雑業であっても、あるいは、華僑が形成するエスニック・ビジネスの世界であっても、それは等しく、「都市雑業層」の経済的世界の形成として、その国際的な分業体制の変動の中で正当にその役割が評価される必要がある。都市に形成される、パーソナルなネットワークをその基盤にもつそうした世界の存在こそ、激しい国際労働力移動のなかで「拠点」としての都市の役割を支える要因となる。彼らがどのように共鳴盤を形成しているのかを見ていく必要がある。

〔引用文献〕

- 杉原 薫・玉井金五編、一九八三、『世界資本主義と非白人労働』大阪市立大学経済学会。
杉原 薫・玉井金五編、一九八六、『大正／大阪／スラム——もう一つの日本近代史』新評論。
伊豫谷登士翁・梶田孝道編、一九九二、『外国人労働者論——現状から理論へ——』弘文堂。
町村敬志、一九九四、『世界都市東京の構造転換』東京大学出版会。
浅野慎一、一九九三、『世界変動と出稼ぎ・移民労働の社会理論』教育叢書。
HARVEY, DAVID, 1991, *THE URBANIZATION OF CAPITAL* (邦訳『都市の資本論』青木書店)。
氏原正次郎・高梨 昌、一九七二、『日本労働市場分析』(上、下)東京大学出版会。
刈谷剛彦、一九九一、『学校・職業・選抜の社会学』東京大学出版会。
P・ブルデュー、一九九三、『資本主義のハビトゥス』藤原書店。
広田康生、一九九五、『都市雑業層とエスニック・コミュニティ』奥田道夫編『二十一世紀の都市社会学——コミュニティとエスニシティ』(三月刊行予定)。
川崎市編、一九八七、『川崎労働史 上』川崎市。
山脇啓造、一九九四、『近代日本と外国人労働者』明石書店。
I・ウォーラスティン、一九九四、『史的システムとしての資本主義』岩波書店。

磯村英一、一九六四、『都市社会学研究』有斐閣。

島崎 稔・北川隆吉編、一九六二、『現代日本の都市社会』三一書房。

隅谷三喜男、一九六四、『日本の労働問題』東京大学出版会。

隅谷三喜男、一九六七、『日本資本主義と労働問題』東京大学出版会。

似田貝香門、一九七三、『日本の都市形成と類型』倉沢進編『社会学講座5 都市社会学』東京大学出版会。

山田鋭夫、一九九一、『レギュラシオン・アプローチ』藤原書店。

R・ボワイエ、一九九〇、『レギュラシオン理論』藤原書店。